

皮心伝心

乾癬バブル

1980年代後半からの好景気は1990年代初めに終焉、崩壊し、のちにバブル景気と称された。この数年、毎月どこかで乾癬の研究会、講演会が開催され、学会で同時時間帯に乾癬のスポンサードセミナーが重複することも珍しくない。いささか食傷気味との声を耳にすることも多い、乾癬を取り巻くこの状況、とりわけ経済的に恵まれた状況を俯瞰しながら、私は乾癬バブルという言葉の頭に思い浮かべている。

アレファセプトは評判倒れだったが、その前評判には高い期待を寄せていた。インフリキシマブ、アダリムマブの臨床試験を経験し、既存の薬剤を凌駕する高い治療効果に驚愕した。幸運なことにIL-17産生細胞を研究業績として米国留学から帰国した。留学中に、予想よりも早く日本でも生物学的製剤が乾癬治療に承認され、実臨床で使用可能になった。新規薬剤の高い臨床効果が実感されることによって免疫学分野の基礎研究が活性化し、乾癬の病態解明が進むことでさらに新しい薬剤が開発されるという、極めて良好なスパイラルが展開されていた。私は、基礎研究、臨床の両面でこの流れに上手く乗り、いまの立場に至った。

生物学的製剤の登場により乾癬の治療目標は大きく変化した。重症例であってもPASI90(90%以上の皮疹改善)やPASIclear(皮疹の完全消失)を目指すようになり、以前は有効な治療がなく手をこまねいていた関節症状も積極的に治療できるようになった。乾癬学会への参加者は年々増加し、規模も拡大の一途をたどっている。疾患ごとの研究会は多数あれど、1つの皮膚疾患に特化した学会は日本乾癬学会だけである。以前から乾癬に携わってきた者として、この分野が隆盛し、臨床、基礎研究が進歩するのは喜ばしいことである。そして、内容が充実した今の状況は決して中身の無い泡ではない。

この幸せな状況はいつまで継続するのだろうか？ 新しい抗体製剤はまだ開発されている。高い治療効果を期待できる低分子化合物の開発も進められている。しかし、市場は限られている。生物学的製剤の治療適応となる症例が頭打ちとなり、多数ある生物学的製剤が淘汰され始めたら状況は変わるだろう。生物学的製剤登場前、乾癬はいまほど多くの人たちに注目される疾患ではなかった。バブルがはじけた後も見越して基礎、臨床研究を続けていきたい。

馬淵 智生

(東海大学医学部専門診療学系皮膚科学教授)